

滅びノ恒星：恐怖ノ世界

幸福野郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——世界を狂気〔絶叫・絶望・絶無〕に染めた、正体不明の災厄から数十年。各地に散らばる創造の剣によって、滅びの恒星と呼ばれる脅威は収まった。

しかし、何者かの手により剣は壊され、世界は再びの危機を迎える。

記憶喪失の少年は、機械音が響く不気味な空間で目覚め、オルタと言う少女と共に滅びの恒星に立ち向かうこととなる。

謎の剣士や兵長などの強力な味方と、あまりに強大過ぎる滅びの恒星の脅威。

恐怖にまみれた世界で少年は……。

・やる夫スレで連載中の作品を小説化したものです。タイトル「やる夫は滅びの恒星

に立ち向かうようです」

・一応プロローグのみで完結となります

目次

時計の針：記憶の喪失	1
剣士の背中：勇者の面影	9
怪物の脅威：面影の少女	15
恒星の脅威：少年の忘却	20

時計の針：記憶の喪失

◆時の狭間は、不可侵の領域なり——◆

「……」

ひどく響く機械音。

金髪の少年はそれに誘われて覚醒した。

「ぐ……」

口から漏れた声は弱弱しく、今にも死にそうなほどの頼りなさ。

その身に纏う衣服はボロボロで、とてもまともとは言えない外見である。

ふと彼は、自身の右手がずっしりと重いことに気づいた。

「？」

右手に握られているのは平均的な大きさの両手剣。

特に目立った部分もなく、デザイン自体には疑問がない。

彼が強く疑問に思っているのは一つ。

（俺は……なんで剣を？）

自分がなんで剣を持っているのか分からない。

強く握られたそれは奇妙なほどにしっくりきいているのに、そもその用途を思い出すことが出来ない。

何かと戦っていたのだろうか？

「俺は」

そして、思い出せないことを正確に理解していく。

記憶がない。名前も出身も年齢も。

ここに至るまでの経緯が抜け落ちている。

ひどく空虚な頭の中だ。

「……」

強い不安にかられて周囲を見渡す。

そこは薄暗い場所であり、機械音がいやに響く空間。

薄汚れて色褪せた石の床や壁を見るに、かなり歴史のある建物に思えた。

何処なのかは当然分からない。

「なんだってんだ……？」

痛む体を起こして、彼はしっかりと立つ。

握った剣は手放すことなく。

何が起こるか分からないので不安なのかもしれない。

「……」

彼は握った剣を構える。

自然とそうしていた。

自分でも分らない不安感からだ。しかし、なぜかとても確信できる脅威を感じた。その脅威は当然、己の命を脅かすものだ。

「!!」

薄暗い室内の奥。

動く影をしつかりとその目に捉えた。

ゆったりと近付いてくるそれは、朧気ながらも、彼の心臓を凍らせ、その足を震わせるような存在だ。

「……誰だっ」

恐怖で声は上手く出ず、少し聞き取りづらいものになってしまった。

そのせいなのか返事は来ず、影はゆっくりと接近してくる。

そしてそれを見た。

「う、あ」

その影の正体は、二足歩行の狼のような怪物。

体長は二メートル近くあり、目はまるで小動物のような愛らしさで。

その右手の爪には赤いなにかが付着していた。

「あ、ああ」

ほのかに漂ういやな臭いは気のせいではないのだろう。

なので恐怖はどんどん増していき、思考は逃走・逃げる・逃避に満ちていく。

息が荒くなり、心臓はきりきりと痛む。

なんでいきなりこんなことになっているのかと、理不尽さに泣きそうだ。

ただでさえ記憶を失った不安で潰されそうだというのに。

「く、そ」

逃げたくても逃げられない。

おそらく背を向けた途端に、追いつかれ、殺されるだろうから。

つまりこの状況を回避する方法など一つしかない。

「……ッ」

両手で持った剣で戦う。

あの怪物を殺し、己の命を救う。

弱肉強食の理に従って、動物としての生を掴み取るのだ。

(それしかないッ。戦うッ)

彼の目に闘志と勇気が宿り、目前の敵を屠る決意が固まった。

そうと決まればあとは、どうやって攻撃を仕掛けるかだ。

その剣をどこに突き立てるか・相手の動きはどう来るか？

（あの巨体だ……そこまで速くはないはず。ならば一気に接近し、一気に仕留めるッ）
しかしもし速かったら？

そんな疑問が浮かび、彼の体は硬直してしまった。

おそらく速いイメージが頭から離れない。

（とにかく突っ込んで……確かめるしかない）

そう思ったが。

相手の鋭い爪を見て、考えが停止する。

（すごい鋭い……あんなの受けたら、きつと俺の体は……顔に当たったら、どうなる？

■■■が挟られて……即死……目は、じゃあ、腕に腹にッ）

考えがまとまらない。

さつきまでの決意が嘘のように四散していく。

決意を固めるのは簡単なのだ。

死を・恐怖の前にしてもそれを貫くのは死ぬほど難しいのだ。

（どうやって動くッ、相手は、自分はッ、そもそも勝てるのかッ、負けたらッ）

そうして悩んでいる内に。

怪物はアウトラインを踏み越える。

「う」

そのラインは彼が勝負を挑む可能性を保証するもの。つまり、それを敵が越えたということは。

「うああッ!?!」

恐怖の限界に達して剣を放り投げた。

唯一の救いであった筈の剣を、自ら手放してしまふ。

そして選択したのは逃走。

出来ないと結論付けたはずの選択肢。

「ああああッ!?!」

必死に走る彼の耳には何も聞こえない。

それだけなりふり構わずの逃走を行っている。

転びそうになりながらも、その両足は思ったよりも速く動いていた。

(火事場の馬鹿力か!?! いけるッ!!)

「ぎゃあッ!?!」

気のせいだった。無謀だった。

すさまじい左足の痛みと共に激しく転び、鉄柵に激突してしまふ。

打ち付けた痛みすら気にならないほどに、恐怖は増していく。

早く、速く、起き上がらないと死――。

「が、ああッ!？」

床を這いながら、急いで振り返った先にいたのは。

「――あ」

捕食者の笑みを浮かべて・見える・獰猛な牙を見せつける怪物の・唾液がぬめった・口の中――。

◆一瞬、頭を過った光景は◆

「あ」

◆すべてを飲み込む、滅びの恒星◆

――ある町の一角。

「そう恒星」

◆朝日に照らされた町の中心で、その人物が言った◆

◆銀髪の麗人は、町の上空にあるソレを見上げる◆

「剣を修復しなくては……滅びの恒星が世界を飲み込む前に……!!」

◆空を歪めるかのような・形や色を正確に認識できない・禍々しい恒星◆

◆タイムリミットは十二の時を巡るまで◆

◆再び動き出した災厄ハ、誰にも抗えぬ力となって世界を壊ス◆

剣士の背中：勇者の面影

「はあ……はあ……ッ!!」

恐怖感で乱れに乱れた息をなんとか整えようとするが、そんなことは不可能だった。危機的狀況で冷静に行動する。

それが最善。

そんなことは誰でも分かっていることだが。

(冷静に……ッ!? なれるかよ……ッ!!)

吐きそうになりながらも彼は考える。

目前に迫る怪物から逃げる方法を。

戦うなどとんでもない。

(無理だ……!! もう戦えないッ)

一度逃げてしまったせいで心は折れてしまった。

剣はどこかにいつてしまい、怪物は素手でどうにかなるわけもなし。

足の痛みがどんどん増していき、恐怖感で心が壊れそうだ。

(くそ、くそ、くそオッ)

歯が砕けそうなほどに食いしぼる。

ゆつくりと接近する怪物の牙が、外から射す僅かな日射しによつて、危険な光を放つた。

これから自分がどうなるかを考えてしまった。

(ああ……食われる、のかッ)

鳥が虫を食う。

人間が鳥を食う。

そして、怪物が人を食う。

そんな食物連鎖に組み込まれてしまったことを自覚した瞬間、叫び出しそうになつてしまった。

いや。

「おああああああ……!! ああああああッ!!」

叫んだ。

恐怖をどうにもできずに子供ののように、恥も何も投げ捨てて、彼は思い切り泣き出した。

それだけならまだしも。

「ゆ、ゆるしてくれえ……頼むううう……!!」

怪物相手に命乞いを始めてしまった。

どう考えても言葉が通じるような相手ではないのだが、とにかくなんでもいいから、己の命を守るための行動を。

危機的状況ならでは、恐怖に支配された愚かな行動。無意味な命乞い。

「ああああッ」

怪物の無機質な目はまるで動かない。

じっと、これから食べる・腹に収めるエサを見ている。

その動きがびたりと止まった。

「あああッ!?!」

希望を抱く少年。

「あぁっ——」

それを砕くように怪物は口を閉じた。

◆飛び散る血は◆

◆床や鉄柵に付着した◆

「——残念だった」

◆そして◆

「食事の時間は終わりだ。モンスター」

その怪物の血を浴びた白銀の剣を持つ男が、少年を庇うように立っていた。

モンスターと呼ばれた存在は、斬撃を受けたことで怯んで後退している。顔に受けた切り傷から血が垂れていた。

「——ちよつと、アンタ大丈夫？」

◆新たな声が◆

◆いまだに座り込んで震えている少年に掛けられた◆

「お、あ？」

「ほら、しつかりしなさいな。死ぬような傷じゃないわよ」

「あ、ああ？」

「だめだこりや……完全に混乱してるわね。もう、情けないっ」

声の持ち主は、セミロングのやや濃い水色の髪を伸ばした女性。

ロングスカートのメイド服のような、きつちりした服を身に纏い、少年の傍で屈みこんでいる。

どうでもいいですよと言う感じに無関心を装っているが、その心配そうな表情を隠すことが出来ていない、とても綺麗な少女。

「なんで……っっていうか誰……？」

「え——」

当然知らない人なので問いかける少年。

その言葉を聞いた少女の顔が酷く歪んだ。

この世の終わりにでも直面したような、すさまじく絶望を宿した顔。

何も分からない少年だが、彼女の大切な部分を踏みにじってしまったのは分かる。

「あ、いや、その……俺は……」

どうやって弁明すればいいか混乱し、何も言えなくなる。

少女は顔を伏せて、無言で体を震わせていた。

（くそッ、なんだよッ。怪物の方はどうなった!?!）

罪悪感から逃げるように怪物の方を向く。

そこでは黒いコートを着た剣士が、怪物と対峙している。

剣士の体格はかなり良くて、どこかの国の兵士なのだろうかとも思える。

（まるで……勇者のような背中）

◆何故だろう◆

◆さっきまでの不安を打ち砕く、希望の剣士の姿が◆

◆少年にはとても眩しく、そして——◆

「やれやれ……今日はこれから予定があったのによ。おれ様お怒りだ」

眩く剣士の男。

怪物と対峙しているというのにその姿は余裕がある。

今にもとびかかりそうな敵の動きを睨んで、どんな些細な動作も見逃さないようにしていた。

「来いよ。滅びの恒星の【欠片】」

◆ 剣士の言葉と同時 ◆

◆ 狼のような怪物が、勢いよく飛び掛かった——！ ◆
「は？」

◆ その怪物の肉体は ◆

◆ 一瞬で胴体を真っ二つにされ、血をまき散らし、地に落ちた ◆
「おれ様を舐めるな。【LEVEL】の【モンスター】如きが」

怪物の脅威：面影の少女

「……」

「……」

無言のまま、背負われた男と背負った男が広い平原を歩いている。

朝の日差しが眩しく輝き、ジュラ平原を照らす。

背負われた金髪の少年が口を開いた。

「……ありがとうな、本当に」

「気にすんなよクリス。これでも民を守るのを仕事にしてるんでね。てかさつきも礼を

聞いたぞ」

「……いや、何回言っても足りないだろ。命を救われたんだ」

金髪の少年クリスは顔を後方に向けた。

そこに見えるのは先程までいた大きな建造物、名を【混迷の場】というらしい。

レンガ造りの壁は古ぼけていて、ところどころに罅が入っている。とても古い建物の

ようだ。

「あんな、いつからあるかも分からないような場所に、何の用があっていたんだ？」

「いや、それは」

「ああすまん、そういう記憶喪失だったな」

「……別にいいさルーク」

青い短髪の少年ルークは、聞いてはいけないことを聞いてしまったと、少し申し訳なさそうな声を出した。

しかしクリスとしては、あのどうしようもない恐怖から救ってくれたルークに感謝しても足りないのです、まるで気にしてはいない。

とはいえ記憶喪失で不安ではあるのだ。

自身の喪失という事態は間違いなく恐怖感を煽り、クリスの体を震わせる。

「何よ情けないわね。そんなに震えちゃって」

「……」

掛けられた言葉は左後方からのもの。

無駄に偉そうなというか、ひねくれた雰囲気女性の声。

クリスは少し渋い顔をして振り向いた。

「フン、覇気のない顔つき。モンスターに襲われてそんなにショック？」

「オルタ。なんで喧嘩腰なんだ？」

水色の髪の少女オルタは、その挑発的な態度をルークに咎められた。

それでも鼻を鳴らして態度を改めないオルタに、クリスは疑問が尽きない。

自分は彼女に対して何か失礼をしてしまっただろうか？

もしや。

(胸を凝視してたのが悪かったか……)

あまりに彼女がクリスの好みに合致していた為、まじまじと見とれてしまった時があった。特に大きな胸は主張が激しく、思わず凝視してしまった失敗。

もしそれが原因ならば何とか弁明せねばならない。

(しかしどうやって?)

あまりに貴女が綺麗で見惚れてしまい、二つの山を見てしまいました。もう滅茶苦茶好みです結婚してください……。なんて言える筈はなく。

それにもし原因が他のことなら、逆に相手にとんでもないバクダンを投げつけることにもなるかもしれない。

クリスは悩んだ。

「さっきから何をジロジロ見てるのよ」

「おわっ」

オルタに睨まれてしまったクリス。

考えていたら、自然と彼女の肢体を眺めてしまったようだ。

これではさらに話がこじれるかもしれない。

「ははは、クリスはオルタみたいなのが好みか！」

「い、いやそれは」

「すぐに否定しないとは……本当に脈ありだな！」

「よ、よせよ」

顔が赤くなってしまうクリス。

実際にルークが言っていることが当たっているからこそその反応。

どう考えても言い逃れが出来ない状況だ。

「……………」

そして影響されるようにオルタの顔も赤くなる。

クリスは色々と怒っているのかもしれないと震え、彼女から目を逸らした。

ルークのからかいのせいだとんだ事態だ。

「青春してんなあ。会ったばかりとは思えないぜお前等。息が合ってる気がする」

「……………それはルークもだろ」

「お、嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

クリスたちは初対面とは思えないほどに息が合い、噛み合っている雰囲気を作成していた。

おかげで記憶喪失の不安もいくらか解消され、クリスは心の安定を保っている。本当にこの二人には感謝してもし切れないと彼は思う。

「ま、モンスターに襲われたんだから、少しはリラククスしないな。いくらでも話相手になるぜ」

「……モンスターか」

「気になるか？ ……当然だよな」

クリスは自身を襲った怪物の姿を思い出し、大きく身震いする。

開いた口に並ぶ牙・獠猛な爪・狂気的にも見えてしまう目……。

どの要素も恐怖を抱くもので、今でも襲い掛かってこないか不安になってしまいうぐら
いだ。

巨大で素早く、こちらを捕食しようとする存在。

まともな神経を持っているのなら、強い恐怖感を持って当然だろう。

話の通じない強大なそれは人間に死のイメージを植え付ける。

「あの怪物は……滅びの恒星によって生まれ、世界中に存在していやがるのさッ」

恒星の脅威：少年の忘却

「滅びの恒星……」

「そうさ」

◆三人は遂に町を視界に収めた◆

◆東西南北＋中央エリアに大きく分かれた町◆

(ソルタウンっていうとか……モンスターに対する備えは万全なんで、安心できるらしい)

クリスの目に映るのは町を囲む大きな外壁。

モンスター対策だろうと思われるが、さらに内部には、モンスターを排除するプロ集団がいるらしいとルークは言った。

(警備兵団……ルークもその一人か)

ルークですらその組織の中で新入りに過ぎないというのだから、クリスは驚愕するしかない。

あの怪物を倒した衝撃は頭から消えず、なので猶更信じれない事実だ。

ルークが言うにはどうやら武器にも秘密があるようだが……。

「そのソルタウンの——上空にあるだろうか？」

「……」

ルークが指さす先を見遣るクリス。

そこにはあるおかしなモノが浮かんでいた。

いやもしかしたら、浮かんではないのかもしれないし、そこに実際にあるわけでもないのかもしれない。

「なんだこれッ」

どれだけ目を凝らしてもソレを正しく認識できない。

どんな色をしているのかも、形をしているのかも、定まらずに無形である。

その事実には背筋を凍らせたクリスは呟いた。

「——あれが滅びの恒星」

モンスターを世界にばら撒いた元凶にして、いずれ世界を滅ぼすと言われている恒星。

いつ頃から発生したのかは不明。世界の始まりから在るとい説すら存在する。

何もかもが謎に包まれているが、脅威だけは確かに存在し、世界を徐々に蝕んでいく。

「……」

クリスはそれをじつと見つめ、沈黙する。

その先にあるなにかを想像して、それを見ようとでもするかのように。得体の知れない好奇心のようなものに突き動かされて、見つめ続ける。

「……ッ」

◆じつと・じつと◆

◆その正体を見定めようと——◆

「」

◆クリスの視界が赤で染まった◆

◆何かを強く握った自分がいる◆

◆黒い翼を生やした少女が◆

◆彼を見て嘲っている◆

◆何を忘れているのかと◆

◆銀髪の少女が彼に言った◆

◆かけがえのない誰かと◆

◆どこかで離れてしまったようだ◆

◆顔のない少年が◆

「ゲームスタートだ。クリス」

◆恐怖を湧き上がらせる声で、クリスに言った◆

「が、アあああツツ?!」

クリスの口から絶叫が漏れる。

彼の頭がぐちゃぐちゃに混ざり合い、脳までかち割れそうな痛みと共に、意識は散り散りにはじけ飛んでいく。

周囲の自身を案ずる声すらまともに届かない状態になり、クリスの世界が急速に壊れていった。

もう何も見えないし・何も聞こえない。

想像を絶する恐怖の中で、彼の意識は途絶え、闇に沈んで行った。



かつて起きた滅びの恒星による災厄——12の絶望。

その時世界に何が起きたのかについては諸説ある。

生き残った者の殆どは、発狂するか記憶を失うか、まともな状態ではなかった。強者と呼べる戦士ですら恒星に勝てず、次々と死に絶えていった。

その為現在までに伝わった情報は少なく、かろうじて残っていた資料ですら、十分ではなくとも災厄に対する対抗策を考えられるものではない。

あるマジックアイテムの力によって恒星の影響を抑えることに成功したが、完全に封じることは不可能で、恒星の研究を行っていた者達は嘆いた。

◆あれは、人間にどうにか出来るものじゃない◆
そもそもルールが違う。

立っている世界が違う。

どうやれば蟻に星を壊せるといふのか。

次元の違う脅威の前に、人々は必死に抗い、そして目を逸らすしかない。酒に逃げ、娯楽に逃げ、どこにも逃げられてはいないというのに、ただ無力に背を向ける。

その時にある平穩に浸ったまま・いずれ来る脅威に心の底で怯えて。
どうしようもないことは当然で。

それは勇者と呼ばれる存在も例外ではないだろう。

◆覆せない恐怖の前に◆

◆誰もが怯えるこの世界の果てハ？◆